慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Montherlantの<<Port-Royal>>をめぐって
Sub Title	Autour de "Port-Royal" de Montherlant
Author	二宮, 孝顕(Ninomiya, Takaaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.174(173)- 183(164)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Montherlant の《Port-Royal》をめぐって

二　宮　孝　顕

Henry de Montherlant の劇作のうち，最高の傑作は「死せる王妃」《La reine morte》(1942) と云われているが，一部の批評家の間では，「ポール・ロワィヤル」《Port-Royal》こそ最もすぐれた作品だと高く評価されている。Jean-Jacques Gautier は，この戯曲の高貴，簡潔，純粋，均整，圧縮，勇気などの特質を強調し，これこそモンテルランの最高の傑作であると断言している。[1] また Julien Green は次のような劇評を書いている。「モンテルランの《Port-Royal》は，読んだ時よりも舞台で見た時の方が十倍も美しく思われた。ジャンセニストのきびしさ溢れるこの芝居の台詞ひとことひとことに耳を傾け，2時間半も身動きせずにいた。作者は宗教上の苦悶を巧みに観客に伝え，観客の大部分は恩寵の問題には全く縁がなく，また聖体拝受を禁じられてもいっこう構わない人たちであるが，la Sœur Angélique de Saint-Jean の言葉を聞けば彼女とともに苦しまずにはいられないのである。文学的な面からみても，人間精神の面からみても，われわれは美の偉大なる作品をもったわけである。創作界不振の時代であるだけに一層光彩を放つように思われる。この作品は作家の光栄をしっかりとうちたてるものである。[2]」《Henry de Montherlant》の著者 Georges Bordonove も亦，これまでは《La reine morte》や「サンチァゴの騎士団長」《Le maitre de Santiago》(1947) が最高の傑作と云われてきたが，今後は《Port-Royal》がその位置を占めるだろうと述べている。[3]

この戯曲を最初に読んだ時は，Port-Royal についての予備知識が不足で，正直に云って，あまり興味はわかなかつた。しかし，1954 年 12 月 8 日，Jean Meyer 演出のもとに Comédie-Française (Salle Luxembourg) で初演されたこの芝居は非常な好評であった。俳優も，la Sœur Angélique には Annie Ducaux, la Sœur Françoise には René

Faure, パリ大司教には Jean Debucourt という顔ぶれであるからどんなに素晴らしい舞台であったかが想像された。そしてこの芝居をパリで観て来た人々に尋ねると，議論が多くて難かしいが，とにかく見ていて深い感動を受けた，という答であった。その後，演劇誌《Théâtre de France》第5号（1955）でカラーの舞台写真を見，また 1957 年 Pathé からこの作品の上演全部を録音したレコードが出たのでこれを聞いた時 私は J.-J. Gautier その他の批評家の言の妥当なことを納得し，改めてこの作品について研究しモンテルランという偉大な作家に少しでも近づきたいと念願したのである。

《Port-Royal》の成立過程

モンテルランが Sainte-Beuve の《Port-Royal》を読んだのは 1929 年，北アフリカの Alger である。1925 年（29 才）以来パリを去り，「追いつめられた旅行者」（Voyageur traqué）としてスペイン，イタリヤ，アフリカなどを転々とし，「三十男のクライシス」（crise de l'homme de trente ans）に悩みつづけたが，漸くそれもおさまった頃であった。Port-Royal をめぐる数々のエピソードのドラマティクな性格に心打たれ，いつかこの僧院についての戯曲を書こうと決心したのである。(4)

11 年後になって初めてその決意を実現し，1940 年4月，ドイツの大軍が押寄せる数日前に《Port-Royal》を書き始めた。しかし，間もなくこの作品執筆を中止して，短期間ではあるが戦線に赴く。休戦後，再び《Port-Royal》に取かかつたが，なかなか難渋し，1942 年の夏に漸く書きあげたのである。これが《Port-Royal》の第一稿であるが，占領下で上演される見込はなかつた。終戦になつてからは，《Le maitre de Santiago》を書き，この方を先に上演した。その後 1948 年，《Port-Royal》を読み返したが出来栄えに不満足で，そのまま机の曳出しにしまった。更に 1953 年，また読み返し，第一稿の失敗を認め，第二の《Port-Royal》を執筆したのである。僧院史の他のエピソードに想を得，最初の《Port-Royal》とは全く趣の異なる作品が出来上った。第一稿の場面は，monastère des champs で4幕からなっていたが，今度の作品の場面は faubourg Saint-Jacques の monastère で，幕間なしの長い一幕物である。そして，第一稿の時ほど史実にとらわれることなく，1664 年8月 21 日と 26 日の2日に起った事件を1日にまとめ，古典劇にみられるような，時，場所，筋の三単一の芝居が出来上ったのである。(5)

主題

主題と云っても，普通の芝居にみられるような物語の発展はない。17 世紀の後半，ジャンセニストが受けた迫害の主要なエピソードのひとつであり，最初から緊張した場面がつづく。Jansénius[(6)] の書《l'Augustinus》を異端とする法王の教書に従わない Port-Royal の修道女たちに対してどういう決定がなされるか，それを待ち，怖れる彼女らの不安動揺がひしひしと感じられる。中心人物とも云うべき la Sœur Angélique de Saint-Jean はジャンセニスムを奉ずる名門 Arnauld 家の一員であり，Port-Royal 修道院の改革者 la mère Marie-Angélique de Sainte-Madelaine の姪にあたる。修道女たちは団結しているが，全部の修道女が同様である筈はなく，若い la Sœur Marie-Françoise de l'Eucharistie の如きは，神秘主義的魂の持主で，《Moi, je suis une petite goutte qui sèche si elle est détachée de la source[(7)]》と云うほど，祈りに恵念する純粋な女性である。彼女は地上の争い，Port-Royal の尼僧たちの抵抗にさえも疑いをもつ。

la Sœur Angélique は高慢，峻厳，冷淡に見えるが，その反面には神経質な弱さ，謙虚，愛情などを持ち合わせ，常に自分を苦しめる傾向をもつ複雑な女性である。彼女とは対照的に，ジャンセニスムの権化のように信仰に徹しているのは元僧院長で，やはり Angélique の叔母の一人である la Mère Catherine-Agnès de Saint-Paul である。la Sœur Angélique が動揺するのをみて彼女は問う。《……Vous croyez en Dieu, et vous craignez quelque chose ?[(8)]》これに対する Angélique の答は，《Je me crains.—Je crains aussi tout le reste. Vous vous souvenez de la petite Sombreuil quand elle disait : 《J'ai peur des arbres. J'ai peur de l'eau. J'ai peur du vent. J'ai peur de tout.》 Moi aussi, j'ai peur de tout.[(9)]》とその不安と恐怖は深刻である。彼女は更に，八月の堪えがたい暑さと心の苦しみを吐露する。《Comme je l'attends, ce premier de Septembre ! Encore cinq jours! Alors, au bout de nos jardins, on recommencera de sentir l'odeur des champs. *Septembre* se relâche. Mais *Août* est tout dur et en feu. (*Glissant les doigts sous le bandeau de sa coiffe*)—Que ce bandeau me serre !……[(10)]》 la Mère Agnès は彼女の弱さを責める。《……Je vous accuse de la part de Dieu de préférer la nature â la grâce, et, dans la nature, de ne trouver pas même le courage. Vous excluez le courage et vous excluez la grâce. Que vous reste-t-il ?》これに続く la Sœur Angélique の台詞は，《Pardonnez-moi, ma Mère, mais me voici tout devant les Portes des Ténèbres, et je crois en effet qu'il ne me reste rien. Si j'avançais d'un pas de plus……Déjà le vent qui sort des

Portes fait vaciller la flamme de ma lampe; s'il arrivait qu'il aille l'éteindre? Déjâ je ne peux plus parler, ma langue se colle à mon palais, et les prières que je voudrais faire ne seraient pas des prières mais des cris.〉[11] 引用がやや長くなったが，la sœur Angélique と la Mère Agnès の信仰に関する問答は前半の最も興味ある部分である。

正午の鐘が鳴るとともに，Paris 大司教 M. de Beaumont de Péréfixe が高位の聖職者たちを従えて入って来る。修道女たち全員を集め，〈l'Augustinus〉に含まれる五箇条の命題を有罪とする「認定書」に署名することを改めて要求するが，僧院長をはじめ，尼僧たちは依然としてそれに応じない。妥協と譲歩をあくまでも排除しようとする空気がみなぎっている。署名することはジャンセニスムを信奉する彼女らにとって良心に逆うことであり，従って神にそむくことになるからである。大司教は就任して4カ月しかたたないが，Port-Royal のために 25 才も年をとったようだと嘆いている。また，彼女たちのことを，〈Elles sont pures comme des anges, et orgueilleuses comme des démons.〉[12] と云っている。しまいには業をにやし，彼女らを反逆者とみなし，秘蹟を禁ずると宣言する。更には，警察当局者，武装した警官の居並ぶ前で，追放されるべき 12 名の修道女の名を読みあげる。(この 12 名については，野心ある修道女 la Sœur Flavie の密告によるものであることがあとでわかる。) 大司教が，〈Refoulez ces filles dans la clôture. Elles vont partir sur l'heure.〉[13] と云うと，尼僧たちの間から〈Dieu est contre nous!〉という声さえも洩れる。この騒ぎの間祈り読けていた la Sœur Françoise は，大司教に向い，宗教団体に対するこの不当な弾圧を烈しい勢いで非難する。それまでは，「認定書」に関する争いにはとかく無関心であった彼女であるが，今この迫害を目前にして，天啓を受けたように積極的な抵抗に踏みきるのである。大司教一行の立去ったあと，やがてここを出て行かなければならない la Sœur Angélique と残留する la Sœur Françoise との別離の場面がこれに続く。la Sœur Angélique の信仰に対する疑いは更に深まる。〈Un doute……sur toutes les choses de la foi et de la Providence.〉[14] 彼女からはすべてが失われてゆくような気がする。〈Qu'ai-je fait pour être à ce point abandonnée?〉[15] とひとりつぶやく。la Sœur Françoise に対してはこれまでのように冷たい態度ではなく，抑えかねる愛情さえも見受けられる。しかし，la Sœur Françoise には〈Portes du Jour〉が開かれるのに反し，la Sœur Angélique は〈Portes des Ténèbres〉に向う。〈Pour moi, j'ai franchi les Portes des Ténèbres, avec une horreur que vous ne pouvez pas savoir et qui doit n'être sue de personne.〉[16]

《火の車》に乗せられて彼女たちが立去ったあと，それに代る 12 名の Sœurs de la Visitation Sainte-Marie が入って来る。礼拝堂から聞こえる尼僧たちのミサのコーラスが高まる中に，黒づくめの服装をした《Sœurs de la nuit》が一人づつ入って来るところで幕がおりる。

全く drame intérieur であり，statique な芝居である。舞台はなんの装飾もない修道院の応接室のひとつ。灰色の壁を背景に出はいりする尼僧たちは真白な衣，胸に真紅の大きな十字を染めぬいた肩衣，そして頭に黒い布をつけている。pittoresque で動きの多い芝居とはおよそ反対で，ギリシャ劇に近いものである。問題を提供するドラマではなく，長年にわたる Port-Royal の紛争をただ一日のうちに展開する。舞台に描き出されるのは眼に見えぬ心の動き，それが観客を感動させるのである。そして，作者は幕間を与えるいとまもなく，この緊迫した悲劇をいっきに終局に導く。

この劇のやまと云えば，二人の主要な修道女の心の交錯であろう。同じ出来事を契機として，la Sœur Françoise は突如光明を見出すのに反して，la Sœur Angélique は疑惑の深淵に沈んでゆく。そして，こうした動きの触媒の役をするのは大司教である。また，個々の人物を離れて全体をみれば，J.-J. Gautier も指摘しているように，ordre と désordre との闘いである。purs と impurs との争いとも云い得るであろう。権威をふりかざす当局者と，不屈の精神を以て闘う少数の尼僧たち。太陽王と云われるルイ 14 世治下におけるレジスタンスであるから，彼女らの抵抗がどんなに勇気のいるものであったか，又それだけにジャンセニストの信仰がいかに強烈なものであったかが推量される。この精神は抵抗運動の精神にも通じるのではないだろうか。そして，裏切者 la Sœur Flavie のような存在は対独協力者ともみられよう。

La Sœur Angélique de Saint-Jean.[17]

主人公ともみなすべきこの修道女について究明することがこの作品を解くひとつの鍵になると思われるが，先づ実在の Angélique はどのような女性であっただろうか。

彼女は Robert Arnauld d'Andilly の次女で，1624 年 11 月 28 日に生れた。(従ってこの芝居では 39 才 9 カ月と記してある。) 幼時から Port-Royal に入れられて宗教教育をうけ，長じては maitresse de novices (修練士長) として若い修道女の養成につとめた。la mère Angélique と la mère Agnès との二人の叔母があったが，彼女はこの芝居に出てくる Agnès の方により深い親しみをもっており，本当の母のように感じていたようで

ある。Pascal の妹 Jacqueline とも親交があったが，この友人の早世は Pascal の死とともに彼女に大きな悲しみを与えた。《l'Augustinus》に有罪の判決が下ったのは 1653 年で，それ以来の紛争であったが，1664 年 8 月 26 日，モンテルランの《Port-Royal》にみられる通り，12 名の被追放者の一人となり，Port-Royal を追われ，アノンシアード修道院に連れて行かれたのである。修道院とは云うものの鍵をかけられ，外界との接触をいっさい絶たれた牢獄生活で，9 月の初めから10月の中旬にかけて特に信仰の疑惑に悩んだ。(モンテルランの芝居では，この crise de conscience の予想が 8 月 26 日の中におりこまれている。) しかし，彼女は苦難によく堪えて署名を拒み続け，11 カ月後，1665 年 7 月には Port-Royal des champs へ移され，ここで《Relation de captivité》を書く。(これは当時の Port-Royal に対する迫害を知るに重要な文献である。) 1669 年 la paix de l'Eglise により解放された後は衰退期の Port-Royal のために尽力し，1678 年僧院長になり，1684 年 4 月 1 日に亡くなるまでこの職にとどまった。

Sainte-Beuve は《Port-Royal》の中で彼女のことを次のように記している。《une âme forte, triste, tendre, capable de toutes les belles agonies, une âme grande aussi dans son ordre et admirable》[18]，また《une âme malade》とも書いている。これを読んでもわかるように，強さとともに弱さを，頑固さとともに優しさをあわせ持つ複雑な性質，自らを苦しめる傾向を持つ女性であり，モンテルランがよく云う《Alternance》(交互性) を一身に蔵するドラマティクな人物である。Angélique は Port-Royal の第二の世代 (seconde génération) の中では，Pascal は別として，最も才能があり最も重要な人物であった。モンテルランは特に Angélique につき多くの資料を調べ，細心の注意を払って描いている。

La Sœur Françoise の方は，Christine Briquet という修道女をモデルにして作者が創造した人物である。大司教の訪問の結果二つの魂は相反する方向に分れるが，Angélique の苦悶が克明に描かれているのにくらべ Françoise の転換は鮮やかではない。(Robert Kemp)[19] しかし，二人の尼僧の別離の場面は，作者がこれまでに書いた戯曲のどの幕切れよりも悲壮である。(Georges Bordonove)[20] Angélique はモンテルラン好みの人物であるし，Port-Royal とジャンセニスムはモンテルラン好みの背景であり，Marcel Jouhandeau が云う《climat de Montherlant》[21] であるだけに，この作品が彼の最高の傑作と称されるのもうなづかれる。

Montherlant と Catholicisme

《Port-Royal》は，《Le maitre de Santiago》，《La ville dont le prince est un enfant》「少年が君主の町」(1951) とともに，いわゆるカトリック三部作をなすものである。騎士団の ordre, 学校の ordre, 次に修道院の ordre を取扱ったのである。

《Le maitre de Santiago》も《Port-Royal》も，pureté への同じ渇望，sacrifice への同じ意欲をあらわし，don Alvaro と la Sœur Angélique との間には多くの類似点が見出される。先づ，二人とも人並はずれて orgueilleux である。信仰とは自己を完全に放棄することと考えており，人間愛は全く無用だと信じている。彼らはまた，俗世から追放されているものと感じており，世間は彼らに縁のないものと思っている。しかし，二つの作品の間には次のような違いもある。don Alvaro は希望という翼の羽ばたきによって上昇するが，la Sœur Angélique は絶望の淵に沈降する。Santiago では，犠牲が救いだという確信の上に立っているが，Port-Royal を支配しているものは無償の苦しみ，苦しみへの欲求である。一方はカスチリヤの騎士たちのやや狂気じみた christianisme であり，他方は無言の諦めの christianisme，苦悩の christianisme である。最後の場面にしても，Santiago では，父と娘は祈りの姿勢の中で一諸になり，神の方へ向上するが，Port-Royal では，la Sœur Angélique と la Sœur Françoise は互にわかれ，明るさは見出されない。

《La ville dont le prince est un enfant》は初期の小説《La relève du matin》「暁の交替」(1920) と同じく，作者が少年期の一部を過した Neuilly の Collège de Sainte-Croix を舞台にした《inspiration catholique》の作品である。

Henri Perruchot[22] は Montherlant 論の中で，カトリック三部作がいづれも共同体（騎士団，学校，修道院）を舞台にしていることに注目し，作者が共同体の生活を好むことを強調している。実生活では，学校，スポーツ，戦争などを通じて Communauté を体験したが，その好みは後までも続き，作品の中にあらわれているのである。

自分で incroyant だと称しながら，こうした宗教三部作を書くのは奇妙である。モンテルランは，《Un voyageur solitaire est un diable》[23] の中で次のように云っている。「ぼくは信仰をもっていない。しかし，何をしても，洗礼がぼくをカトリックにしている。」「ぼくは明らかにカトリシスムの外側に立っている。そこから，さまざまな態度でカトリシスムを見，ぼくの精神生活や詩的生活に適するものを取り入れるのである。つまり，カトリシスムを人間的に行使するのだ。」

また，Jacques de Laprade[24]によれば，モンテルランは何でも受け入れる人だから，厳しい宗教でも肉感的な異教でも受容する。彼は déiste でも，positiviste でも，mahométain でも，bouddhiste でも，existentialiste でも théosophe でも何でも望み通りのものになり得るし，自分の宗教を自分で創り出すこともできるだろう。多面的であることはモンテルランがしばしば云う《alternance》と関連する。彼自身も，《Le maître de Santiago》のあとがきに，「自分の作品の中にはキリスト教的血脈と《瀆神的》（或はそれよりももっと悪い）血脈があり，ぼくはそれらを交互に（alternativement）養っている」と書いている。

モンテルランはカトリック的作品を書いても，Bernanos や Mauriac のようなカトリック作家とは違う。《Port-Royal》にしても，キリスト教的立場より Port-Royal のヒロイズムを愛しているように思われる。大体ヒロイズムはモンテルランの芸術の根底をなしていると云い得るだろう。迫害に対する修道女たちの抵抗はまことに悲壮である。自分を善良なジャンセニストであると信じ，権力と妥協しないのが彼女らの罪なのだから全く犠牲者のドラマである。Port-Royal は平和な修道院ではなく，ここでは人間の苦悩の場である。要するに，《non》と云う situation である。作者は《Un voyageur solitare est un diable》の中で，「ぼくは常に《non》と云うことを強制されており，《non》と云わずには書くことはできない」と洩らしている。don Alvaro も la Sœur Angélique をはじめ Port-Royal の尼僧たちも亦《non》と答える人々である。Anouilh が《Antigone》の中に求めたものをモンテルランも探究しているように思われる。

文体

文体に関しては，われわれ外国人には評価しかねるが，Gabriel Marcel[25]，Jacques Lemarchand[26]その他多くの作家，批評家が筆を揃えて《Port-Royal》の高貴な文体を激賞している。しかし，また，Pierre de Boisdeffre[27]のように，《Port-Royal》の言葉は労せずして 17 世紀の調子を取戻しているがそれは un bel exercice littéraire であって魂よりも知性に訴えるものであり，Bernanos の《Dialogues des Carmélites》ほど観客の心を打たない，というような意見もある。いづれにせよ，古典的な格調の高い文体で，Racine の芝居などと同様，邦語に移すことは殆んど不可能であろう。

（この小論はモンテルランの戯曲研究の一環をなすもので，さきに発表した「モンテ

ルランの戯曲における父と子」(慶応義塾創立百年記念論文集　法学部　第三部) 及び「《死せる王妃》にあらわれたモンテルランの特質」(法学研究別冊　教養論叢　第六号) と併読されるならば幸いである。)

註

(1) 《Le Figaro》, 11—12 déc. 1954

(2) 《Journal》, 14 déc. 1954

(3) Georges Bordonove; Henry de Montherlant (Editions Universitaires, 1958) p. 77

(4) Note sur 《Port-Royal》, 1944 《Le Maître de Santiago》に収録。

(5) Préface de 《Port-Royal》

(6) オランダの神学者 Cornélius Jansen, 通称 Jansénius (1585—1638) が grâce に関する Saint Augustin の見解を披瀝し，これを擁護した大著作が《l'Angustinus》。この中には Jansénisme の本質的なものがすべて含まれている。この書が Louvin で公刊されたのは 1640 年。彼の死後は Saint-Cyran によって引継がれる。Richelieu は《l'Augustinus》に強く反対し，Saint-Cyran を Vincennes に幽閉した。Port-Royal では Arnauld を中心に Jansénisme を信奉する。1653 年，法王 Innocent 10 世は，Jansénius の教理を五箇条の命題に圧縮し，これを異端であると決した。Arnauld は Sorbonne から追放され，ジャンセニストの迫害が除々に加わる。1660 年 Louis 14 世の干渉が始まり，更に 1664 年，王の旧師 M. de Beaumont de Péréfixe が大司教に任命されるに及んで，一段と激化する。一方，尼僧たちは，論戦するよりも，苦しみ，沈黙する立場をとっていたが，1664 年，勅令を以て五箇条の命題を有罪とし，これらの命題が実際に Jansénius の書にあることを認める「認定書」Formulaire に署名することを命じた。6 月 9 日から17日まで大司教は Port-Royal に出向き，修道女たちに尋問した。更に，Chamillard を confesseur に任命し彼女らの抵抗を弱めようとしたが成功せず，遂に 8 月 21 日，大司教は彼女らに秘蹟を禁じ，26 日には，最も頑強とみなされる 12 名の修道女を追放するに至った。モンテルランの芝居では，これが一日の中に圧縮されている。

以上，《La Table Rnode》1954 年 12 月号所載の《Notice sur l'histoire de Port-Royal》及び同号の Jean Gautier《La doctrine janséniste》に拠る。

(7) 《Port-Royal》(Gallimard) p. 71

(8) Ibid. p. 90

(9) Ibid. p. 91

(10) Ibid. p. 97

(11) Ibid. p. 109—110

(12) Ibib. p. 144

この言葉は Sainte-Beuve の《Port-Royal》(Bibliothèque de la pléiade Livre V. p. 686) の中にも見出される。このほかにも，同様な引用がある。

(13) Ibid. p. 133

(14) Ibid. p. 181

(15) Ibid. p. 182

(16) Ibid. p. 184—185

(17) 〈La Table Ronde〉 déc. 1954 所載 Louis Cognet 〈Angélique de Saint-Jean〉 に拠る。

(18) Livre V p. 705

(19) R. Kemp: La vie du théâtre (Editions Albin Michel) p. 86

(20) G. Bordonove: H. de Montherlant (〈La Table Ronde〉 déc. 1954)

(21) M. Jouhandeau: Port-Royal, climat de Montherlant. (〈La Table Ronde〉 déc. 1954)

(22) H. Perruchot: Montherlant (La bibliothèque idéale, Gallimard, 1959) p. 38

(23) Un voyageur solitaire est un diable. (Gallimard, 1939, 1961) p. 109

(24) J. de Laprade: Le théâtre de Montherlant (Editions Denoël, 1950) p. 106

(25) G. Marcel: Premier jugement sur Port-Royal 〈La Table Ronde,〉 déc. 1954)

(26) 〈Théâtre de France〉 V (1955) p. 17

(27) P. de Boisdeffre; Une histoire vivante de la littérature d'aujourd'hui (Le livre contemporain, 1958) p. 626